

鳥取県福祉研究学会第19回研究発表会 発表要旨等一覧

口述発表

●＝発表者

通し 番号	分野	分野 番号	分科 会	分科会場	発表 時間	研究代表者 所属団体等	発表者 氏名	研究者氏名 (ふりがな)	発表テーマ	発表要旨	研究者 氏名
1	高齢 (施設系)	①	第1分科会 (施設) A	K-201	10:20～ 10:40	社会医療法人明和会医療福祉センター 渡辺病院	岸田 純果	きしだ すみか	称賛した関わりにより認知症患者の自力摂取率が上がった事例	認知症高齢者は様々な要因が関係し、自力で摂取することが難しい。しかし、適切な支援や環境調整をすることにより、残存機能を活かし自力摂取の機会を増やすことにつながるのではないかと考え、称賛した関わり・できない箇所のサポートする援助を行った結果、自力摂取量が増加した。	●岸田 純果
2		②			10:45～ 11:05	社会福祉法人あすなろ会 わかさ・あすなろ	中川 和也	なががわ かずや	「睡眠の質の向上につながる行動とは」～見守り支援システムの活用を通して～	施設利用者全員に導入した見守り支援システムの睡眠データをきっかけに、昼夜逆転傾向がみられていたご利用者のアセスメントを行い、職員間でケアを見直し統一した事で、日中の活動量が増え、生活リズムが整い、睡眠や生活の質の向上につながった取り組みを報告する。	●中川 和也 ●大石 敦規 西浦 華子 太田 奈緒子
3		③			11:10～ 11:30	社会福祉法人賛幸会 特別養護老人ホームはまゆう	霜村 まどか	しもむら まどか	「要介護高齢者の口腔内の現状」～歯・補綴物の脱落と誤飲～	歯や補綴物の脱落・誤飲を100%予防することは困難であるが、口腔内・義歯の状態をあらかじめ把握することで異常の早期発見と重大事故を防ぐことができる。早期発見のための当施設での取り組みを報告する。	●霜村 まどか
4		④			11:35～ 11:55	医療法人養和会 介護老人保健施設仁風荘	吉儀 明子	よしぎ あきこ	アクティビティとして味噌汁作りを取り入れた介入効果	10年以上にわたり週1回～2回実施している味噌汁作りが認知機能や日常生活にどのような効果をもたらしているか検討した。	●吉儀 明子
5		⑤			12:00～ 12:20	社会福祉法人こうほうえん 介護老人福祉施設新さかい 幸朋苑	手島 なつみ	てしま なつみ	クランベリーを活用～カテーテルの詰まりの改善に向けて～	バルンカテーテルのご利用者で、チューブが頻繁に詰まることがあり、不快感を感じるご利用者がおられた。クランベリーが以前から効果があると医学的に発表されているが、なぜ高齢者施設で流行らないのか、その原因と工夫、また実際使用してみた効果を発表する。	●手島なつみ 松本 有加 渋谷 美樹

鳥取県福祉研究学会第19回研究発表会 発表要旨等一覧

口述発表

●＝発表者

通し 番号	分野	分野 番号	分科 会	分科会場	発表 時間	研究代表者 所属団体等	発表者 氏名	研究者氏名 (ふりがな)	発表テーマ	発表要旨	研究者 氏名
6	高齢 (施設系)	⑥	第1分科会 (施設) B	K-206	10:20～ 10:40	社会福祉法人こうほうえん 介護老人福祉施設よなご幸 朋苑	遠藤 芙希子	えんどう ふきこ	「安定した『きのこ』の摂取 が排便状況に与える影響につ いて	近年、各種『きのこ』の持つ健康効果が明らかになってきてい る。その効果の1つ、腸内環境改善・排泄改善に着目した。排 便に関するあらゆる問題を抱えておられるご利用者の皆さんに 対してこの効果を活用できないかと考え、きのこの摂取強化が 排便にどう影響を与えたか調査を実施したので、その結果を報 告する。	●遠藤 芙希子 ●多々納 汐里 ●松本 幹
7		⑦			10:45～ 11:05	社会福祉法人こうほうえん 介護老人福祉施設さかい幸 朋苑 介護老人福祉施設なんぶ幸 朋苑	野坂 賢一 池田 真大	のさか けんいち いけだ まさひろ	抱え上げない介護を目指した 10年間 ～ノーリフティング推進委員 会の軌跡～	健康に働きやすい職場環境を目指すために、2016年度に「ノー リフティング宣言」を行い、ノーリフティング推進委員会を発 足し、移乗支援における介護事故・職員労災の軽減、適切な福 祉用具普及のために取り組み、今年10年目を迎える。推進委員 会の活動として、抱え上げない移乗介助の達成率向上、重大事 故削減、移乗に関する労災事故軽減の3つを目標に掲げた取り組 みの成果と課題が明らかになったことを報告する。	●野坂 賢一 ●池田 真大 ●持吉 孝郎
8		⑧			11:10～ 11:30	社会福祉法人賛幸会 特別養護老人ホームのであ はまゆう	倭島 真美	わじま まみ	医療依存度の高い要介護者の 施設での受け入れ	当法人では、医療依存度の高い利用者でも、本人・家族の意向 を尊重し、住み慣れた地域や自宅で過ごしつつ、適切に医療ケ アが受けられるように介護施設における医療対応力の強化を進 めてきた。これまで当法人で受け入れてきた医療依存度の高い 利用者への支援について整理する。そのうえで、さらに医療が 必要な利用者の受け入れについて、課題と対策を検討した。	●倭島 真美
9		⑨			11:35～ 11:55	社会福祉法人賛幸会 特別養護老人ホームはまゆ う	山根 大介	やまね だいすけ	介護分野における外国人技能 実習生の受け入れと支援体制 の構築 ～実習の円滑な実施に向けた 現場での取組と課題～	令和6年7月技能実習生2名をタイ王国より受け入れた。外国人技 能実習生受け入れまでの準備・受入れ後の対応を整理し、その 成果を明らかにし、今後の展望について考察した。	●山根 大介 ●桑村 紀男 ●平田 春美 ●北村 香代子
10		⑩			12:00～ 12:20	社会福祉法人鳥取福祉会 養護老人ホーム鳥取市なご み苑	池本 美鈴	いけもと みすず	寄り添うチカラで整える居室 環境 ～転倒・転落の低減！自律と 安心をカタチに～	転倒・転落リスクの軽減を図るとともに、ご利用者の想いに寄 り添った居室環境を再整備することにより、主体性と生活意欲 を高め、それが地域社会への参加および自律の促進につなが ると考え、多職種で構成するリスクマネジメントチームを組織 し、実践を開始。	●池本 美鈴 ●高山 孝

鳥取県福祉研究学会第19回研究発表会 発表要旨等一覧

口述発表

●＝発表者

通し 番号	分野	分野 番号	分科 会	分科会場	発表 時間	研究代表者 所属団体等	発表者 氏名	研究者氏名 (ふりがな)	発表テーマ	発表要旨	研究者 氏名
11	高齢（在宅系）	①	第2分科会（在宅）	K-205	10:20～ 10:40	社会福祉法人あすなろ会 河原あすなろデイサービス センター	植田 空	うえた そら	パワーリハビリテーションの 効果について ～より質の高い訓練を目指し て～	当事業所にパワーリハビリテーション機器が導入されて4年目になった。実際にどのように利用者へ身体的・心理的な改善・効果がみられているのか疑問に感じるようになり、今回の調査を行った。その結果をもとに、当事業所での訓練の在り方を明確化し、より効果的な、質の高い訓練に繋げることを目的とした取組みである。	●植田 空 ●井手口 景子 前田 理恵
12		②			10:45～ 11:05	医療法人養和会 通所リハビリテーションセ ンター仁風荘	古田 裕也	こだ ゆうや	ボッチャ活動がご利用者 の QOLに及ぼす影響	デイケアの利用者5名を対象に1年間ボッチャ活動を実施 し、QOLの変化を調査した。評価には短縮版SF12を用い、活力と心の健康の向上が確認された。活動を通して、他者との交流や主体的な行動が促進され、精神面にも良好な影響が見られた。ボッチャは誰でも楽しめる特性があり、今後も継続的な実施によりQOL向上が期待される。	●古田 裕也 石田 愛美 宇田川 愛友

鳥取県福祉研究学会第19回研究発表会 発表要旨等一覧

口述発表

●＝発表者

通し 番号	分野	分野 番号	分科 会	分科会場	発表 時間	研究代表者 所属団体等	発表者 氏名	研究者氏名 (ふりがな)	発表テーマ	発表要旨	研究者 氏名
13	障がい児・者福祉	①	第3分科会A	K-202	10:20～ 10:40	一般社団法人権利擁護ネットワークほうき	近藤 健	こんどう けん	精神科病院内での不在者投票について（全国調査から）	精神科病院内での不在者投票の実態調査からみえたもの	●近藤 健
14		②			10:45～ 11:05	鳥取県精神保健福祉士協会	浦島 考雄	うらしま たかお	鳥取県東部圏域の精神障がい者の地域移行支援体制を作る	鳥取県東部圏域における精神障がい者支援体制を構築する。障害の有無にかかわらず、すべての人が本人らしい生活を行えるようにするために、受け入れ体制を検討してきた。約10年以上に渡って検討した成果についての報告。	●浦島 考雄 前田 忍 峰 健一
15		③			11:10～ 11:30	一般社団法人ほだきのとつと	前岡 良汰	まえおか りょうた	自閉スペクトラム症児に対する「適応的支援」の再考～社会的価値創造をもたらす葛藤図式の視点から～	本研究は、「適応的支援」をマジョリティによる排除の観点から再考を促すために、葛藤図式を用いてASD児による社会的価値創造の支援の様相を明らかにし、支援者による支援の在り方を検討した。	●前岡 良汰
16		④			11:35～ 11:55	NPO法人鳥取県自閉症協会	福谷 紀男	ふくたに のりお	避難体験事業から見えてきたこと～環境づくりの一提案～	重度の発達障がい児・者及び家族にとって災害時の避難は、非日常を少しでも日常に近づける環境づくりが大切である。そのためには、少しずつで良いので「備え」をしていくこと、体験を行っていくことが必要である。	●福谷 紀男 三矢 裕子 小松 しのぶ
17		⑤			12:00～ 12:20	医療法人養和会 訪問看護ステーション仁風荘	佐藤 麻子	さとう あさこ	自己肯定感の低い広汎性発達障害患者への関わり～ストレングスモデルでの関わりを通して、利用者が意思決定できるまで～	引きこもりの利用者に対して、その人ができること、得意なことに焦点をあて関わることで、利用者がデイケア参加を検討し意思決定できるようになった変化を振り返り、どのような関わりが有効であったのか、ストレングスモデルを通して今後の訪問看護のケアに活かす関わりを報告する。	●佐藤 麻子 米田 佳子

鳥取県福祉研究学会第19回研究発表会 発表要旨等一覧

口述発表

●＝発表者

通し 番号	分野	分野 番号	分科 会	分科会場	発表 時間	研究代表者 所属団体等	発表者 氏名	研究者氏名 (ふりがな)	発表テーマ	発表要旨	研究者 氏名
18	障 が い 児 ・ 者 福 祉	⑥	第 3 分 科 会 B	K-203	10:20～ 10:40	社会福祉法人養和会 米子サン・アビリティーズ	上野 柊斗	うえの しゅうと	「やれる」体験を通じて障がい者の外出機会を促す	障がいのある方は一般成人の方より週1回以上の運動実施率が低いとでています。そこで卒業後の運動習慣の低下を予防する目的で、通い慣れた特別支援学校の体育館を利用して、障がい者スポーツや感覚統合運動などを取り入れた活動を実施しています。最近では、屋外活動を取り入れ、地域に出かけるきっかけを作っていますが、参加者から屋外活動を必要とされているのか不明確でした。その為、参加者のニーズ調査を実施したのでその結果について報告します。	●上野 柊斗 石丸 知 小笹 智史
19		⑦			10:45～ 11:05	学校法人藤田学院 鳥取短期大学 幼児教育保育学科	徳田 恋来	とくだ れら	医療的ケア児の保育と保育者の役割	鳥取県内の保育所での医療的ケア児の受け入れ状況や課題などの実態を調査、整理しながら、医療的ケア児が園生活を安全に楽しみ、その発達を保障するために、保育者が行うべき配慮、担うべき役割、整えるべき保育環境について考察した。	●徳田 恋来 ●景山 彩千花 ●山根 未来
20		⑧			11:10～ 11:30	社会福祉法人祥和会 セルブひの	中原 輝房	なかはら てるふさ	できることを活かし、さらに生活の幅を広げる支援	ノーマライゼーションの考え方を取り入れ、障がいの特性やその人個人の持っている強味（ストレングス）を活かし、生活の幅を広げる支援を見直す。	●中原 輝房 ●宮本 楓雅
21		⑨			11:35～ 11:55	一般社団法人ほどきのとつと	猪原 風希	いのらはら ふき	障害のある子どもの福祉における「省察的实践」の在り方と意義を探究 ～「食べる」という行為との出会い直し実践における支援者の学びに焦点を当てて～	障害児通所支援施設の職員である筆者が、活動記録の分析を通して、「食べる」という行為との出会い直し実践について自己省察し、障害のある子どもの福祉における「省察的实践」の在り方と意義について考える。「行為と出会い直すとはどういうことなのか」「大人の意図と場や物のメッセージ性」「省察的实践の在り方と意義」という三点から考察を試みる。	●猪原 風希

鳥取県福祉研究学会第19回研究発表会 発表要旨等一覧

口述発表

●＝発表者

通し 番号	分野	分野 番号	分科 会	分科会場	発表 時間	研究代表者 所属団体等	発表者 氏名	研究者氏名 (ふりがな)	発表テーマ	発表要旨	研究者 氏名
22	児童 福祉	①	第 4 分科 会	K-205	11:35～ 11:55	社会福祉法人あすなろ会 あすなろ久松こども園	松本 尚子	まつもと なおこ	「対話から生まれる豊かな人間関係とチーム力」～語り合いから広がる「みんなのやってみようの輪」を目指して～	語り合いを通して、保育者間の良好な人間関係の構築や、保育者の相互的な学び、チーム力の向上を図ることを目的とし、園内研究会やノンコンタクトタイム等を活かした取り組みを考え、実践した。	●松本 尚子 ●内田 青葉
23		②			12:00～ 12:20	学校法人藤田学院 鳥取短期大学 幼児教育保育学科	門脇 奈那実	かどわき ななみ	鳥取県における病児・病後児保育の現状と課題～保育学生が考えた病児・病後児保育の必要性～	鳥取県内の2つの病児・病後児保育施設への聞き取り調査から、病児・病後児保育の現状と課題を明らかにし、病児・病後児保育を必要としている人に知ってもらうための方策を検討した。また、保育学生が病児・病後児保育に関わる意義についても考察した。	●門脇 奈那実 ●河本 莉佳

鳥取県福祉研究学会第19回研究発表会 発表要旨等一覧

口述発表

●＝発表者

通し 番号	分野	分野 番号	分科 会	分科会場	発表 時間	研究代表者 所属団体等	発表者 氏名	研究者氏名 (ふりがな)	発表テーマ	発表要旨	研究者 氏名
24	地域福祉	①	第5分科会	K-204	10:20～ 10:40	いき○研究会	藤井 有紀	ふじい ゆき	ひきこもり当事者の語りと地域住民の意識から考える「生きやすい地域社会」の検討	本研究は、ひきこもり当事者の語りと地域住民の意識から、生きやすい地域社会の条件を検討した。当事者の語りからは、安心したつながりや差別のない社会などのニーズが示された。住民調査では、価値観の違いを避ける姿勢が排除を高め、共通点の自覚や失敗からのやり直しを肯定する意識が排除を抑制した。さらにイベントを通じ、多様な人々がつながる場の可能性が示唆された。	●藤井 有紀 いき○研究会一同
25	その他の社会福祉領域	②			10:45～ 11:05	学校法人藤田学院 鳥取短期大学 幼児教育保育学科	飯笹 こころ	いいざさ こころ	鳥取県の産後ケアの現状と課題の理解、施策の検討～すべてのお父さん、お母さんのために～	産後ケアの必要性や重要性はありながらも、保育者を目指す私たち保育学生が、産後ケアを理解できているのか、鳥取県の産後ケアの実情を把握しているのかと自問したとき、十分理解できていないと実感した。そこで、本研究では、産後ケアがどのような役割を果たしているのか、具体的にどのような支援が行われているかを整理・理解し、産後ケアの認知度向上のための方策を検討した。	●飯笹 こころ ●田村 志穂 ●中田 衣織
26		③			11:10～ 11:30	社会福祉法人こうほうえん 介護老人福祉施設きんかい 幸朋苑	野口 紗代	のぐち さよ	職員の健康を考える～食に対する意識へのアプローチ～	「健康経営」「職場からの促しを通じて、健診率アップと生活習慣病予防の推進に取り組む」ことを今年度の取り組みとして、この活動に栄養士と看護師の立場から何が できるかを考え『食』に焦点を当て、職員に対して食と健康 についてのアンケート調査、勉強会・試食会を実施。その 成果と課題を報告する。	●野口 沙代 藤岡 麻美 青木 歩美 大島 希世
27		④			11:35～ 11:55	ナチュラルハートフルケア ネットワーク 鳥取ピース しじみ会	福良 智洋	ふくら ともひろ	鳥取県におけるノーリフトの考え方を取り入れた研修の現状と課題～研修参加者アンケートから見える「現場で実践できない理由」～	鳥取県介護専門職研修会にて、ノーリフトの考え方を取り入れた研修を継続的に実施してきたが、研修後に現場での実践や定着に至らないケースも多く見られる。本発表では、研修参加者を対象に行ったアンケート調査を基に、実践が進まない背景要因を個人・組織・制度の視点から整理した。得られた結果を通して、研修の在り方や現場への伴走支援の必要性を検討し、今後の取り組みについて参加者と共に考えることを目的とする。	●福良 智洋 藍田 翔太

ポスター発表

●＝発表者

通し 番号		分野 番号	分科会場	発表 時間	研究代表者 所属団体等	発表者 氏名	研究者氏名 (ふりがな)	発表テーマ	発表要旨	研究者 氏名
1	高齢 (施設系)	①	エ ン ト ラ ン ス ロ ビー	10:20～ 12:20	医療法人養和会 養和病院介護医療院	若槻 純	わかつき じゅん	QOLを高める外出支援の取 組み	介護医療院において、外出の支援を行いながら理学療法士とし ての目線でARSを評価し、QOL向上について検証した。	●若槻 純
2		②			医療法人養和会 養和病院介護医療院	福間 宏喜	ふくま ひろき	介護医療院におけるDXと多様 な人材活用による生産性向上 の検証	介護医療院における業務負担軽減とケアの質維持向上を両立さ せるため、DX機器および外国人職員の間接業務参加の取組み による生産性向上を検証した。	●福間 宏喜
3	障 がい 児 ・ 者 福 祉	①			医療法人養和会 養和病院	都田 孝之	みやこだ たかゆき	主観的QOLが向上した電動車 椅子シーティングの一例	車椅子や生活環境の不適合でQOLが低下するが、客観的なQOLに 視点を当てており主観的なQOLを評価されていない。CIDPの患者 の進行する症状に合わせて車椅子を選定し住環境の介入や福祉 用具の導入を行い主観的なQOLが向上した。	●都田 孝之
4	児 童 福 祉	①			鳥取県立喜多原学園	赤井 智絵美	あかい ちえみ	喜多原学園の理念に向かう 「喜多原温泉」	児童自立支援施設喜多原学園の理念は「自立し社会と調和して 生活する（ことを支援する）」である。入所している子ども、 その保護者、そして本園職員みんながこの理念を体感し、そ れぞれに力を発揮していくために、支援ツール「喜多原温泉」 を開発し、実践している。その概要をお伝えする。	●赤井 智絵美